【広報文化財コラム「一宮の歴史特集」】㊷

令和4年6月号

一宮町の歴史特集「上総広常の実像を探る（14）」

今回は、広常が謀殺された状況についてみていきましょう。『愚管抄』（慈円（1155～1225）作、承久2年（1220）頃成立）、『鎌倉年代記』（元弘元年（1331）頃成立）という史料の記述内容をまとめると状況は次のとおりです。

寿永2年（1183）12月22日、広常は梶原景時（？～1200）と双六を打っていたところ、梶原が盤の上をさりげなく越え、広常の首をかき切りました。その首は頼朝の前に差し出され、広常の子・能常も死亡したとされます（討ち取られたのか、自害したのかは不明）。

このちち広常の縁戚は縁坐という形で所領を没収されます。ただ、広常の娘が嫁いでいた小笠原長清、平時家は縁坐を免れています。

この謀殺は先述したように頼朝が「穢れ」としていることから、幕府の御所内（大倉御所か）で行われたとみられます。しかし梶原が広常を殺した太刀を洗ったとされる場所（写真）は伝広常屋敷跡の近くにあるため、上総氏屋敷内で広常の謀殺が行われた可能性も否定できません。ただ上総氏屋敷内で当主の広常の謀殺が成功できるとは考えづらく、ひょっとしたら御所内で広常が謀殺されたのち、広常の屋敷を梶原らが攻撃し、そののちに太刀を洗った、という構図も考えられなくはありません。しかしその場合でも広常の家臣らが討ち取られたという記述や伝承はないため、上総氏屋敷には能常がおり、そこで能常が討ち取られたもしくは自害したという可能性も推測されます。

真相は不明ですが、いずれにせよ上総氏は当主と後継者を失い、衰退することになります。

▲太刀洗の水
（神奈川県鎌倉市。2018年10月筆者撮影。広常を切った景時がここで刀を洗ったという。）

（学芸員　江澤一樹）

【問合せ】教育課　☎（42）1416

令和4年7月号

一宮町の歴史特集「上総広常の実像を探る（15）」

広常の死後、大部分の上総氏一族は処罰され、所領を没収されたといいます。そのような中で、玉前神社に広常がかつて奉納したという甲と願文が発見されます。『吾妻鏡』寿永3年（1184）正月の出来事をみていきましょう。

以前紹介したように、広常謀殺の「穢れ」から年始の鶴岡八幡宮の参拝を取りやめた頼朝。そんな頼朝のもとへ正月8日、玉前神社の神主・田中兼重らが訪れ、かつて広常が神社に甲を奉納していたと伝えます。すでにその甲は神社の神宝となっていたため、代わりに新たに甲2領を神社に奉納し、広常が奉納した甲を持って来るよう頼朝は命じます。

正月17日、使者が神社から広常が奉納した甲を持って頼朝のもとへ戻ってきました。「小桜皮縅」の甲だったと『吾妻鏡』には記されています（「小桜皮」とは小さな桜の花を一面に散らした柄の皮のこと）。

その甲には願文が結び付けてあり、それは頼朝の武運長久を祈るものでした。広常が無実の罪であったことがわかり、頼朝は後悔して処罰した広常の一族を赦すことを決めたといいます。なお、この願文は5月号の第13回目の連載で紹介しています。

しかしながら、赦免されたとされる上総氏一族はその後表舞台にでることはありませんでした。広常の死と共に、上総氏の往事の地位は千葉氏に取って代わられることになるのです。

写真の甲は江戸時代の天保14年（1843）に一宮藩藩主の加納久徵（1813～64）が、この故事にならって玉前神社に奉納した甲です。

▲萌黄縅胴丸
（一宮町指定有形文化財、玉前神社所蔵、千葉県立中央博物館大多喜城分館寄託）

（学芸員　江澤一樹）

【問合せ】教育課　☎（42）1416